

論 文

1980年代以降アメリカにおけるプロテスタント牧会神学

— 3つのアプローチ —

才 藤 千津子

同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
准教授

Abstract

In pastoral theology, pastoral practices undergo critical theological reflection. Pastoral practices, the experience of community, and theological interpretation are mutually engaged in critical reflection to generate a pastoral theology. This paper provides an overview of three approaches to Protestant pastoral theology found in the United States since the 1980s—the communal-contextual approach, feminist approach, and intercultural approach—by examining how each approach can be used to interpret the contemporary world and its problems. It further describes the characteristics and theological method of each approach. In her concluding remarks, the author discusses the pressing issues that pastoral theologies currently face and the possible future directions of pastoral theology.

I. 序

「パストラル (pastoral)」、日本語では「牧会 (的)」あるいは「司牧」と訳される言葉は、ラテン語の「pastor (牧羊者)」から派生したキリスト教神学用語である。聖書に、羊飼 (牧師) が迷える羊たち (信徒) を支え導くたとえ話が出てくるが、キリスト教では、牧師の働きを「羊飼 (牧師)」のイメージによって説明することが多い。また本稿ではパストラルケアということばがしばしば使われるが、伝統的には、牧会を求める人々に対しての一生を通じての霊的 (スピリチュアル) なケアとサポート、とくに生の意味の問題、究極的な価値の問題で悩んでいる人、苦しんでいる人への注意深く強い関心をともなう「魂への配慮」のことを指す。パストラルケアは、英語ではしばしば「魂のケ

ア」(the care of souls)とも呼ばれる。このようにパストラルケアとは、キリスト教の伝統において、神 (超越的存在) と教会 (信仰のコミュニティ) という背景のもとで、悩める人をいやし、支え、導き、和解させつつ生の「究極の意味」を探求してゆく宣教上の働きのひとつであり、現在でもキリスト教会の牧師や信徒にとって、そのアイデンティティの核となる重要な業である (Mills, 1990 他)。なお、以上のように「パストラルケア」とは、教会を中心として行われる牧会上の働き全般を指す広い概念であるのに対して、本稿でしばしば使われる「パストラル・カウンセリング」とは、パストラルケアの中でも、牧師と援助を必要としている人との合意に基づいて牧師のオフィスなどで行われる短期のカウンセリングのことを指している。

では、本稿のタイトルでもある「牧会神学」(あるいは「牧会学」とは何を指すのだろうか? 牧会神学とは、教会や学校、病院などのキリスト教コミュニティで実践される牧会の働き

に対して神学的考察を加えるものであり、いわば、牧会実践をより深く考察する試みを支える神学の業である。牧会神学は、神学理論と牧会実践の具体的な現実とのダイナミックで相互批判的な対話のプロセスの中から生まれてくる。神学が牧会に批判的な影響を与えると同時に、牧会実践もまた神学に影響を与えそれを変えてゆく可能性を持つのである。今日の牧会神学においては、牧会の実践的経験とキリスト教の伝統、文化、教会などの信仰のコミュニティが交差する地帯で成立し、社会学や心理学など近接諸学問との学際的対話のもとで神学的考察がより深められてゆくと考えられている (Burck & Hunter, 1990)。

アメリカのプロテスタント教会において牧会神学という用語が一般に使われるようになったのは、18世紀半ばであると言われる。当時牧会神学は、説教や礼拝学などと同様に、牧師養成のための実践部門の一部であると考えられており、独自の学問的方法を持った領域とはみなされていなかった。のちに牧会神学が独立した学問領域として認められるようになったのは、牧会神学が心理学・宗教心理学の成果から多くを学び、臨床訓練を神学教育に取り入れながら独自の方法を模索し始めた20世紀前半以降である。1920年代には、会衆派の牧師ボイスン (A. T. Boisen) が、伝統的な書物中心の実践神学の教育法を改めて「生きた人間の記録」を神学の教材とすることの重要性を説き、神学教育に初めて臨床訓練を取り入れた。彼はのちにその功績によって「牧会神学の父」と呼ばれるようになる。また、1950年代から1960年代にかけては、当時アメリカで急激に発達を遂げたカウンセリングやサイコセラピーに強い影響を受けてパストラル・カウンセリングが発展し、全米に「パストラル・ムーブメント」と言われる運動が起こった。ハーヴァード大学神学部やニューヨークのユニオン神学校など主要な神学教育機関がパストラルケアや牧会神学を大学院での授業に取り入れ始めたのは、この時期からである。

以上に述べたように、1970年代までのアメリカのプロテスタント教会の牧会神学の主流は、牧師が強いリーダーシップを発揮し、祈祷や説教などを通じて聖書のメッセージを人々に伝える「伝統的な牧会のアプローチ」や、20世紀後半のサイコセラピーの発展に啓発されて発達を遂げたもので、ケアを提供する人と提供される人との人間関係のダイナミクスに主な焦点を当てる「セラピー的アプローチ」あるいは「臨床牧会的アプローチ」であった。

しかし1980年代以降、急速に変化する社会の中で伝統的牧師像に変容が迫られる一方で、心理学やカウンセリングの臨床的モデルに偏りすぎたことにも反省がみられるようになった。そして、パストラルケアや牧会神学が、キリスト教会というコミュニティが提供する「魂のケア」としての本来の宗教的、神学的アイデンティティを回復することや、急速にグローバル化する世界が抱えるさまざまな社会正義の問題に取り組むこと、といった重要な課題に答えなければならないと考えられた。本稿で検討する「コミュニティ・コンテクスト重視のアプローチ」や「フェミニスト・アプローチ」、また近年では、急激にグローバル化する世界における「異文化間アプローチ」が出現した背景は以上のようなものである。

現在、アメリカの多くのプロテスタント教会は、神学教育と牧会への女性の大幅な進出、人種差別や貧困、経済格差、暴力の蔓延といった社会問題の深刻化、グローバリゼーションに伴うヨーロッパ以外からの移民の増加やキリスト教以外の諸宗教人口の増大、メインラインチャーチからの人々の流失、スピリチュアリティ（霊性）への一般の人々の関心の増加といった、近年起こってきた急激な社会変化に対応しようとして格闘している。社会が混乱し、人々の不安が増大しているのは日本も同様である。このように社会が急速に変化し、人間の病や不安に対する魂への配慮と社会正義への取り組みが強く求められている今日の世界においては、生きた人間を具体的に扱う「臨床神学」

ともいふべき教会神学の社会の中に「いやしの共同体」を創出するという働きへの要請が、よりいっそう強まっているといえるであろう（樋口、1989）。

本稿では、1980年代以降現在までのアメリカ教会神学、主として自由主義の立場に立つプロテスタント教会における主な3つの新しい潮流、1) コミュニティーコンテクスト重視のアプローチ、2) フェミニスト教会神学のアプローチ、3) 異文化間アプローチについて、それぞれの立場を代表する神学者の見解を概観する。そしてそれぞれのアプローチにおいて、現代の社会状況をどのような観点から神学的に解釈し実践に取り組もうしているか、教会神学の特質、方法はどのように論じられているかについて考察し、まとめた上で、教会神学における今後の課題について論じたい。

II. プロテスタント教会神学の 3つの新しい潮流

前述のように、1980年代は、アメリカ、プロテスタント教会における教会神学の主流が、それまでの「セラピー的パラダイム」あるいは「臨床牧会的アプローチ」から「コミュニティ・コンテクスト重視のアプローチ」へと、改めて大きくパラダイム転換した時期である。この時期に主な議論の焦点となったのは以下のような点だといえるだろう（Gerkin, 1997 他）。

第一に、教会が提供されるコンテクスト（社会的文脈）の重視と、教会などの宗教的コミュニティを核としたケアの必要性である。教会などのコミュニティを基盤としたパストラルケアの特質と強みは、必ずしも第二次世界大戦後のアメリカで主流となった「セラピー的パラダイム」の下での「1対1の個人カウンセリング」ではなく、むしろコミュニティのもつさまざまなネットワークを利用して行われる「コミュニティ中心のケア」ではないかということがさかんに議論された。

第二に、社会正義の視点の必要性、特に女性など社会的マイノリティの視点を教会に取り入

れることの重要性である。1960年代以降、ベトナム戦争への反対運動や公民権運動などを経験したアメリカの教会、とくに自由主義の立場に立つ教会では、牧師や教会も社会の変革に向けて預言者的役割を果たす責任について論じられた。また、人種差別摘廃運動、女性解放運動の影響がキリスト教会に浸透するにつれて、パストラルケアにおいても、アメリカ社会における貧困や性差別、人種差別などの社会的不正義の自覚と社会変革への取り組みの必要性が強調された。

第三に、グローバリゼーションが進み、アジアや中東地域などヨーロッパ以外からのアメリカへの移民が増加し、インターネットなどによる世界的規模でのコミュニケーションが日常化するにつれて、仏教やイスラーム教など、キリスト教以外の宗教の伝統やキリスト教文化圏以外の人々とどのように対話するかということがパストラルケアの現場でも重要な問題となった。異なった宗教を持った人がパストラルケアの現場で出会うとき、ケア提供者にはどのような態度が要求されるのか、価値観が多様化する世界の中で起こってくる様々な社会問題にどのように取り組むのか、そもそもパストラルケアという言葉自体がキリスト教中心の価値観の上に立ったものではないか、などという議論が現在も続いている。

この章では、以上に述べたような中から出てきた近年のアメリカ教会神学の3つの新しい潮流と、その代表的な神学者、1) コミュニティーコンテクスト重視のアプローチとパットン（J. Patton）、2) フェミニスト教会神学のアプローチとデマリナス（V. M. DeMarinis）、ニューガー（C. C. Neuger）、3) 異文化間アプローチとウインバリー（E. P. Wimberly）、ラーティ（E. Y. Larty）を取り上げ、それぞれが、1) 現代の社会状況をどのような観点から神学的に解釈しようとしているか、2) 教会神学の特質をどう理解しているか、3) 教会神学の方法をどのように考えているかについて考察を加えたい。

1. コミュニティーコンテクスト重視の (communal-contextual) アプローチ

1) 現代の社会状況をどのような観点から神学的に解釈しようとしているか

牧会神学者パットン (J. Patton) は、アメリカにおける牧会神学の発展を、三つのパラダイムで説明しようとした。彼がその第一にあげたのは、伝統的な牧師中心の牧会のあり方「古典的パラダイム (the classic paradigm)」である。キリスト教の牧師は、伝統的に、聖書や説教を語り、信徒のために祈り、霊的な支えと導きを提供することによって牧会に携わってきた。そしてそのなかで牧師は、信徒の抱える諸問題について、主に聖書と伝統的宗教用語や象徴を用いて説明してきたのである。これに対して 20 世紀中盤には、パットンが第二に挙げる「セラピー的パラダイム (the therapeutic paradigm)」が現れた。アメリカでは 20 世紀に入ってパストラルケアと精神医学、サイコセラピーとの対話が進み、牧師のための実践的トレーニングである CPE (Clinical Pastoral Education、臨床牧会訓練) や一対一で牧師が信徒のカウンセリングをするパストラル・カウンセリングの技法が発達した。1945 年以降、プロテスタント・キリスト教会を中心として起こった大きなこの運動は「パストラルケア・ムーブメント」と呼ばれ、牧会神学に「セラピー的パラダイム (the therapeutic paradigm)」と呼ばれる新しいパラダイムを提示することになったのである (Patton, 1993, pp. 4-6)。

しかし、この「セラピー的パラダイム」に対しては、あまりにも心理学やサイコセラピーのモデルに依存しすぎており神学としての学問的独自性とアイデンティティを失っているとか、神学的考察が十分ではないなどという批判がみられた。1980 年代以降の牧会神学は、そのような批判と対話しながら、パストラル・カウンセラーの専門職化、グローバリゼーション、女性差別や人種差別などの社会問題とも取り組んできた。そしてこの時期の牧会神学において特

筆すべき成果のひとつが、この項で取り上げるパットンの牧会神学であり、彼の著書『コンテクストにおけるパストラルケア (Pastoral Care in Context)』(1993 年) や『ミニストリーから神学へ：牧会実践とその考察 (From ministry to theology: Pastoral action and reflection)』(1995 年) だといえるだろう。パットンの神学の特徴は、牧会におけるコミュニティやコンテクストの重要性を主張し、それまでの第一、第二のパラダイムに換わる第三のパラダイム「コミュニティコンテクスト・パラダイム」を提示したことだといえる。この新しいパラダイムの強い影響力は現在まで続いており、後述のフェミニスト・アプローチや異文化間アプローチも、広い意味では同じくこの流れの中から出てきたものだと考えても差し支えないと思われる。

2) 牧会神学の特質をどのように理解しているか

前述のようにパットンは、パストラルケア実践と牧会神学における「コミュニティ」と「コンテクスト」の重要性を強調する。彼にとって、パストラルケアとは、第一義的に「教会など信仰コミュニティのはたらき」である。彼によれば、パストラルケアは単に牧師一人によって行われるものではなく、教会のメンバーひとりひとり、すなわち信仰のコミュニティ全体によって担われるものでなければならない (Patton, 1993, p. 3)。このように彼は、教会などの信仰のコミュニティと、そこでの牧師とコミュニティの人々との人間関係こそが、パストラルケアの基礎になると考える。

このように、パットンにとって牧会神学とは、日常の牧会の働きとの密接な関連のもとで行われる神学的営為であり、それゆえに、たとえば組織神学がそうであるようには、完成された形としても体系的にも語られることはない。たとえある時点でひとつの神学という形で示されることがあっても、牧会神学自体は本質的に常に生成のプロセスの中にあり、決して完結することはない (Patton, 1995, p. 89, 109)。

また、教会神学の営為においては、その人が実際に教会の実践に携わっていることが必要である。神学をする者は、自分が教会の中で日々経験する出来事とそれについての物語を、イメージネーションを働かせながら神学的に考察し解釈してゆくのである。これはどの神学の分野においても同じように大切なことなのだが、特に教会神学においては本質的なことがらであると彼は主張する (Patton, 1995, p. 109)。そしてこの神学は、教会やグループの中で、仲間とともにその出来事を分かち合い、語り合い、いったい何がどのような点で神学的に意味のある出来事なのか、それを神学的にどのように考察すればよいのかをともに考えることによって実践されるのである (Patton, 1995, p. 111, 119-120)。

近年、アメリカの教会や臨床教会訓練の場である病院では、ヨーロッパ系 (白人) アメリカ人以外のさまざまな人種や文化の人々にパストラルケアを提供する機会が多い。そしてそのような状況下、アメリカ社会においてマイノリティの立場にある人々にパストラルケアを提供する場合、もはや「受容的に相手の話によく耳を傾ける」というだけではすまされない問題があることも明らかになった。なぜなら、パストラルケアが提供される背景や環境、とくにジェンダーや人種差別の問題、カウンセラーとクライアントの間のパワー・ダイナミクスを注意深く吟味することなしには、ケア提供者は相手の置かれている状況を理解できないばかりか、反対に相手を害する可能性があるからである。この問題は、特に、アメリカ社会において特権的な地位にある中流階級以上のヨーロッパ系男性への強い批判的視線として、後述のフェミニスト・アプローチや異文化間アプローチにおいても重要な問題として取り上げられた。

パストラルケアのケア提供者として、自分はどうのような価値観や偏見を持っているだろうか？自分が生きている社会の文化的コンテクストや社会構造は、どのように自分のものの見方や考え方を作り上げているだろうか？社会の中で自分が置かれている位置は、自分のケアにど

のように影響を与えているだろうか？またそれは、ケアを受ける人との人間関係にどのように影響を与えているだろうか？パットンは、教会神学においては、教会に携わる者の厳しい自己省察と自らの背景にある文化のダイナミクスへの理解が不可欠であることを強調したといえる (Patton, 1993, pp. 216-219)。

3) 教会神学の方法はどういうものか

パットンは、「実践的方法論 (praxis methodology)」に基づいた彼の神学的考察の方法を具体的に論じる。パットンによれば、教会神学においてもっとも重要な三つの要素は、1) 教会の実践活動、2) 教会等のコミュニティにおける人間関係、そして3) 出来事のもつ豊かな「意味」を解釈することである。この三者は、互いに補完し合いながらそれぞれの発展と深まりを目指してゆく (Patton, 1995, pp. 19-21)。

またパットンは、ミニストリー (宣教の働き) の方法を神学的に論じたホワイトヘッド夫妻 (Whitehead & Whitehead) の先駆的著書『ミニストリーにおける方法 (Method in Ministry)』を例に挙げ、ホワイトヘッド夫妻の方法は、神学的考察の結果としての「決断と行動」を重要視していると指摘する。そして彼自身はむしろ反対に、ひとりひとりが実践経験の分析と考察の中から自らの神学的見解と信仰を形成してゆく探求の「プロセス」自体を重視することを強調する (Patton, 1995, p. 13)。

パットンの神学的考察のプロセスは、以下の三段階を踏んで進んでゆく。パットンによると、神学的考察をする場合にもっとも大切なプロセスは、何よりもまず教会に携わる仲間同士のグループの真摯なやりとりの中で起こる。教会の実践に携わる者は、たとえ牧師であろうとなかろうと、人生とはどういうものであるかとか、教会とはどういうものであるかということに対して自分なりに何らかの暫定的な神学的見解をもっているものである。グループのメンバーが、それぞれそのような自分の経験と神学を互いに持ち寄って、1) 自分の教会の経験の中から、

神学的に「意味がある」と考えられる出来事について思い起こし、2) イマジネーションを働かせ、3) お互いが経験したことや考えたことをグループの中で分かち合うことによって、現場の経験に基づいた神学が形成される (Patton, 1995, pp. 24-25)。

パットンによれば、牧会神学の営為は、第一に、仲間とともに牧会での意味のある経験を「思い起こし、イメージし、語り合う」(Patton, 1995, p. 25) ことから始まる。このステップは、牧会上の出来事についての物語や自分の考えを分かち合うことができるような、サポートティブな雰囲気のもとで行われてこそ有意義なものとなる。彼によると、ありふれてはいるが実は意味深い日常の牧会経験のなかの出来事を思い起こし、それを解釈も批判もしないでまずありのままに仲間と分かち合うことから、神学的考察が始まるのである。そこでは出来事は「客観的」に語られるのではなく、自分自身と直接パーソナルに関わる物語として語られる。

次のステップにおいては、グループの参加者は、その物語を神学的にどう理解すればよいか、イマジネーションを働かせて自由に考えを巡らせる。パットンはここで、イマジネーションを働かせることの意義や、同じように牧会に携わっている仲間と、話し合いながらともに考えることの大切さを強調する。なぜなら、もしそのような共同作業やイマジネーションが欠ければ、いかに神学的に意味のある出来事が目の前にあっても、それに対して慣習的で平凡な解釈しかできず、その出来事がわたしたちの生において持つ豊かな意味を十分に吟味することができないかもしれないからである (Patton, 1995, p. 25)。この段階においては、自分の教会の伝統や自分の信仰の経験についても考えてみるのがよいだろうし、仲間たちがどのように神学的考察を深めるのかに耳を傾けることも、大いに役に立つだろう。ここでは、単に「考える」ということではなく、「出来事の奥深くにまで入り込み、そこに存在しているが未だ隠されていることがらを切り開いてゆく試み」

(Patton, 1995, pp. 96-97) が、要求される。

そして最後のステップでは、自分の神学とイマジネーションと直感によって自分の牧会経験を仲間と分かちあい、共に吟味し、どの出来事がより「意味深い (meaning-full)」ものでさらに深い神学的考察を必要とするのかを判断することになる。そして、その出来事と関連する宗教的シンボルや教義を解釈し、そこから現れてくる問題を考察しながら、自分の「神学の全体像 (theological portraiture)」を創り上げる作業に取り組むのである (Patton, 1995, p. 97, 119-120)。

以上、パットンによって確認されたように、牧会神学のプロセスにおいては、牧会実践と、信仰のコミュニティの経験とコンテクスト、そしてそれについての神学的解釈とが相互批判的に対話する形で考察が進められる。パットンは、カトリック牧会神学者ファーレイ (Farley) の説を引用しながら、神学的考察はキリスト教の神学的伝統がどう言っているかではなく、まず牧会の日常の中で起こる出来事から出発すべきだと述べる。教会の伝統を無視するというわけではない。そうではなく、牧会についての神学的考察は、まず牧会の中で起こっている出来事について考察することから始まり、神学と牧会の経験との対話のなかから神学自体も変容しより豊かにされてゆく、と彼は考える (Patton, 1995, p. 90)。

このように、パットンは、コミュニティとコンテクストの重要性に注目しながら牧会神学の方法について論じた先駆者のひとりである。このアプローチは、前述の通り 1980 年代以降の牧会神学に第3のパラダイムとして強い影響力を持ち、その影響の中から、以下に述べる「フェミニスト・アプローチ」や「異文化間アプローチ」などの新しいアプローチが生まれた。よって、以下のふたつのアプローチは、根本的にコミュニティ・コンテクスト重視のアプローチの立場に立っており、それをそれぞれのコンテクストの中で独自に展開したものだといえるかもしれない。

2. フェミニスト教会神学のアプローチ

1) 現代の社会状況をどのような観点から神学的に解釈しようとしているか

1960年代から1970年代にかけてのアメリカ社会は、ベトナム戦争反対運動や公民権運動の影響によって大きく揺れたが、その影響は当然のようにキリスト教会にも及んだ。この時期の社会改革運動に刺激を受け、キリスト教会の中で影響力を強めた神学的潮流のひとつに「解放の神学」がある。「解放の神学」は、もともと1960年代から70年代にかけてラテン・アメリカで始まったカトリック教会における神学運動であり、神学の基本を貧困や抑圧からの人々の解放に求めるものであった。この解放の神学の流れの中から生まれてきた神学には「黒人の神学」、「アジアの神学」などがあるが、「女性解放の神学」としての「フェミニスト神学」もそのひとつと数えることができる。

フェミニスト神学は、西欧の伝統的キリスト教は男性中心的なものの考え方の上に成り立っており、キリスト教の長い歴史の中では女性の声は抑圧され無視されてきたという認識と反省の上に立っている。そしてその反省のなかから、教会や神学の伝統を批判的に検討し、男性中心の世界観、価値観、男女観を問い直し、女性ひいては人間全体の自由と解放を目指して聖書的・神学的研究を進めようとするものである。その著しい特徴は、女性が置かれているコンテクストを重視することである。フェミニスト教会神学では、理論はある特定のコンテクストとそこでの実践の中から生まれてくるとされ、社会学や歴史学等との対話を通じてコンテクストの社会分析、特に性差別の構造を吟味することが重要だと考えられる。

このようなフェミニスト神学の影響が教会神学において顕著になったのは、聖書学や組織神学等の他の神学諸分野に比べてひと世代遅れて (Miller-McLemore & Gill-Austern, 1999, p. 87)、1990年代頃からである。そして、この時期の教会神学におけるフェミニスト神学の

先駆的著作のひとつが、1993年に出版されたデマイナス (V. M. DeMarinis) 『クリティカル・ケアリング—教会心理学のフェミニストモデル』 (*Critical Caring: A Feminist Model for Pastoral Psychology*) である。デマイナスのこの著書は、教会神学とフェミニスト神学の聖書解釈法、宗教心理学とを対話させる独自のモデルを提示し、女性がライフサイクルの中で出会うさまざまな出来事に対するパストラルケアのあり方を、女性の視点から論じたものである。彼女の理論の独自性は、パストラルケアにとって大切な「注意深い評価」と「適切な関心」、この両方のバランスをとることの重要性を説きながら、フェミニスト神学を基盤とした「批判的ケアリング (critical caring)」という新しい教会のモデルを示したことである (Demarinis, 1993, p. 17)。

デマイナスが議論の主な基盤としてとりあげたフェミニスト神学は、初代教会における女性たちの働きの重要性に光を当てたフィオレンツァ (S. Fiorenza) による聖書解釈の方法である。デマイナスによると、フィオレンツァは、聖書解釈における以下の5つの点の重要性を強調する。第一に、聖書の中の父権的、破壊的で抑圧的な要素をできるだけ詳細に分析すること、第二に、聖書本文が示している原理を、女性の抑圧と解放の経験から明らかにすること、第三に、聖書本文を現代のコンテクストとの対話のもとで解釈すること、第四に、歴史の中で忘れ去られてきた先人女性たちの苦難や理想や希望を、抑圧への闘いへの記憶とされた過去として再構築すること、そして最後に、女性の教会にとって宗教的想像力や礼典、神学、信仰的コミュニティ、シンボル、神話などが持つ力を主張することである (Demarinis, 1993, p. 42)。このように、聖書についてフェミニスト神学の成果を援用して批判的視点から解釈することは、デマイナスのみならずフェミニスト教会神学の立場に立つ人々に共通するものである。

2) 牧会神学の特質をどのように理解しているか

上記のデマイナスと同様、フェミニスト神学の成果を継承し、それをパストラル・カウンセリングに適用してフェミニスト・パストラル・カウンセリング・モデルを構築した女性牧会神学者の一人に、ニューガー (C. Neuger) が挙げられる。ニューガーが目指したのは、フェミニスト・アプローチによるパストラル・カウンセリングのモデルであり、社会正義の問題とキリスト教の信仰を統合することを目的としたものである。彼女は、家庭内暴力やデプレッション、エイジングなど、女性が一生を通して経験するさまざまな問題を取り上げ、性差別が個人や社会にどのような影響力を及ぼすかということ、ジェンダー研究とフェミニスト神学の研究成果を用いて論じる。

ニューガーのカウンセリング理論は、マイケル・ホワイトのナラティブ・セラピーの立場に依っている。彼女が採用するナラティブ・セラピーは、現実が社会的に構成されるとする社会構成主義の立場に基づくサイコセラピーである。ナラティブ・セラピーは、悩みを持つ人々の現実はその人や家族や文化が持つ物語によって形成されているとし、カウンセラーは、人々が出来事に対する新しい解釈やものの見方をすることによって、クライアントが新しく建設的な物語と現実を再構築してゆけるように援助する。社会の中で抑圧されている女性が、自分の本当の「声」を新たに発見し、自分の考えを明確化し、人生の選択をし、生き生きとした人生を仲間とともに作り上げてゆくことのできるコミュニティを創設するために支援をするのが、パストラル・カウンセリングの目的である (Neuger, 2001, p. 29 他)。

3) 牧会神学の方法はどのようなものか

ニューガーは、女性が社会的抑圧や差別に抵抗して自らの状況を変革し、より意義のある人生が送れるよう支援するために、フェミニスト・パストラル・カウンセリングにおける4つのフレームワークを提示する (Neuger, 2001,

p. 29 他)。

- ①女性が自らの声を上げ意見を言うことを支援する
- ②女性が自分の考えを明確化することを支援する
- ③女性が選択をすることを支援する
- ④女性が絆を結ぶこと、コミュニティを形成することを支援する

このように、ニューガーによれば、女性のためのパストラル・カウンセリングは、第一義的に、女性が自らの声を上げ意見を述べることを支援するものである。彼女は、フェミニスト神学において女性が自らの意見を語ることの重要性が強調されていることを例にあげ、言語は現実を映し出すだけでなく現実を作り出す、社会的マイノリティの人々は、言語を奪われているだけではなく、自らの声も否定されていると述べる。カウンセリングは、単に女性が自分の人生の物語を語れるようになることだけを目的とするのではない。フェミニスト・カウンセリングは、女性自身が、長い間抑圧され否定されてきた自分自身の意見、言葉、真実の物語に自ら耳を傾け、しかもその言葉や物語は真実であることを自ら信じるができるように導くエンパワーメントである (Neuger, 1996, p. 95)。

このように、女性が自らの文化の規範に抵抗して自分独自の物語を創造するためには、それをサポートするグループが必要である。サポート的なコミュニティの支援なしに、抑圧と暴力に満ちた社会からの圧力に抵抗して自らの物語を再構築し直そうとするには、女性一人の力はあまりにも脆弱である (Neuger, 2001, p. 234)。よって、社会の抑圧や障壁を作り上げている「物語」に対して抵抗しようとしている女性を支えるにあたって大切なのは、まず彼女たちに「安心できる場所や仲間、コミュニティを提供すること」、それから「異なった意見や立場の人とも共に働くこと」、そして最後に、その中から「それまでのものに対立し、代わる新しい物語を生み出すこと」である (Neuger, 2001, pp. 234-239)。そして、ニューガーによ

れば、このプロセスにおいて、正義、予言者的声、そして連帯というキリスト教の伝統的メッセージこそが、まさに抵抗への希望を呼び起こす力の源となるのである。

この解放へのプロセスを促進するために、パストラル・カウンセラーは、自分の牧会を形づくる神学と自らの信仰のあり方を吟味し、それらの内容を自覚していなければならない。なぜならば、自らの神学や信仰のあり方は、クライアントの話聞き、援助をしようとするときの自分の態度や解釈に強い影響力を与えるからである。

前述のように、フェミニスト神学は、男性中心の聖書解釈と神学を批判したが、その影響のもとにあるニューガーは、自分にとってカウンセリングに携わる際に役に立つ主な神学的テーマは、以下に挙げる四つであるとする (Neuger, 2001, pp. 57-61)。

第一のテーマは、「先行する神のめぐみ」である。クライアントは、人生においてどのように神のめぐみを体験しているだろうか。彼女の人生観は、楽観的だろうか、それとも悲観的だろうか。希望に満ちているだろうか、それとも絶望しているだろうか。信仰とともに歩む生においては、この世において自分が所属する場所があるということへの確信と神への信頼こそが、人生における新たな可能性を生み出す原動力となる。長い間周縁化され、ありのままの自分を受け入れることを否定されてきた女性に対して、パストラル・カウンセラーは、神の無条件のめぐみを伝え、彼女が自分はありのままに神に受け入れられていると感じられるように支える責任がある。

第二のテーマは、「キリストのからだであるコミュニティの力」である。クライアントとコミュニティとの関係はどのようなものだろうか、そこにはあたたかい絆があるだろうか、それとも彼女はそこで傷つけられ、無視され、孤立しているだろうか。家族心理療法では、人は家族によって傷つけられ、家族によって癒されるとも言われる。教会を含め多くのコミュニティで

女性たちに送られるメッセージは、あなたがたは取るに足りない存在であるが、「陰でわれわれを支えてくれている限りは」必要な存在だと言うものである。そのようなコミュニティは、女性たちが生き生きと生きることの助けにはならない。対象的に、人々がサポートティブで団結心が強く、仲間とともに抑圧に対して抵抗することができるコミュニティにおいてこそ、女性たちは、自たちの痛みを満たした物語を語り合うことができるのである。そのようにサポートティブな雰囲気の中本音で語り合えるコミュニティにおいて、自分の物語を語ったり他の女性の物語に耳を傾けたりするうちに、女性たちは、次第に自分の経験は大切に価値のあるものだとすることを自ら信じられるようになる。このようなコミュニティにおいてこそ、社会的抑圧が覆され、女性たちがいやされ、ひいてはそこから社会が変わってゆくのである。

第三のテーマは、「神の多様なイメージにみられる聖なる存在の豊かさと複雑さ」である。クライアントは、神がどのようにこの世界と関わろうとしておられると感じているだろうか。クライアントと神との関係はどのようなものだろうか。もし神のイメージがたとえば男性中心に偏った限定されたものであるならば、女性たちは神を無限に豊かな存在として経験することはできないだろう。私たちが自分を神の似姿として創造された存在だと自覚するときこそ、神が私たち人間に無限の愛とめぐみを関わられたように、私たちも互いに豊かな愛をもって関わりあうことができるのである。

そして最後に、「聖書における出エジプトのテーマ」である。旧約聖書の出エジプト記には、古代ユダヤ人のエジプトでの抑圧からの解放と救いの物語が記されているが、それは女性解放の神学であるフェミニスト神学にとっても重要なメタファーである。神は、神に従う人々を抑圧と絶望から救い出し、信仰と希望に満ちた新しい世界へと導いてくださった。パストラル・カウンセラーとしての仕事も、出エジプト物語のように、女性たちのみならずそのコミュニ

ティ、ひいては社会全体の变革と解放、エンパワメントに参与するものである。

以上、牧会神学へのフェミニスト・アプローチのなかから、デマイナスの『クリティカル・ケアリング』とその聖書解釈への視点、またニューガーのパストラル・カウンセリングにおける女性への支援の方法とその背後にある神学的テーマについて述べたが、前述のようにこのアプローチは、わたしたちが住んでいる社会のコンテクストや社会構造、特に男性中心の社会体制が私たちのものの見方や考え方を作り上げていることへの強い自覚と反省を促すものだといえるだろう。この同じ視点によって、急速にグローバル化する世界の中での、パストラルケアにおける異文化の出会いについて考察したが、次に述べる「異文化間アプローチ」である。

3. 異文化間 (Inter-cultural) アプローチ

1) 現代の社会状況をどのような観点から神学的に解釈しようとしているか

アフリカ系アメリカ人の牧会神学者ウインバリー (E. P. Wimberly) は、アフリカ系アメリカ人教会におけるパストラルケアの伝統に立つ牧会神学のモデルを提唱した。「もしパストラル・カウンセリングがいくつもの文化が会う状況で行われるとしたら、そこで起こることがら、神学的にはどのように説明できるだろうか。」(Wimberly, 1998, pp. 188) これが彼の問題提起であった。

パストラルケアの分野でしばしば使われる言葉に「共感 (empathy)」という用語がある。ケアの提供者にとって、「共感」をもって援助を求める人に応対することは、何よりも大切なことだとされるが、この言葉は20世紀のサイコセラピーの中から生まれてきた用語だと一般に考えられてきた。しかしそれに対してウインバリーは、パストラルケアにおける「共感」の本質は、神がめぐみとあわれみをもって人間を受け入れくださるという聖書の出来事にその根拠を持つのだと主張する (Wimberly, 1998, p. 192)。彼によれば、援助する側とされる側と

が異なった文化的背景を持っている場合、その立場の違いにもかかわらず相手の世界観や経験を「共感」という手段を用いて理解しようとするときには、この「共感」という言葉は「インターパシイ (inter-pathy)」(D. W. Augusberger, 1986, P. 29) すなわち「相互に共感し合う」という言葉で表現されるのである。

近年、パストラルケアにおいて異文化間理解の必要性が叫ばれるようになった背景には、世界の急激なグローバル化と国際化の中での移民やビジネスマン、留学生や旅行者としての人々の移動の増加、またアフリカ系アメリカ人やアジア系アメリカ人など、アメリカでのマイノリティによる神学の台頭がある。そのような流れの中から出てきた神学者のひとり、次に紹介するラーティ (E. Y. Lartey) は、西アフリカのガーナ共和国に生まれ育ったメソジスト派の牧師であり神学者である。彼は母国やイギリスで神学教育に携わった上、現在はアメリカ南部の大学で牧会神学を教えている。彼は、自分がいくつもの国や文化の中で生活してきたことやその中で常にさまざまな宗教に触れてきたことが、自分の神学形成に大きな影響を与えていると述べている (Lartey, 2006, p. 7)。

ラーティは言う。現代は、深まる宗教間対話や緊密化する国際関係など、さまざまな「境界を越えて」人々が出会いを求め、お互いに助け合う時代である (Lartey, 2006, p. 8)。彼は、自分自身西アフリカ、ヨーロッパ、そしてアメリカで教育を受け、その間いくつもの文化的伝統に影響を受けて自己形成をしてきたことに触れながら、急速に多様化する現代世界においては、パストラルケアの提供者がいくつもの文化的背景を持つ人のケアに携わることが、今後ますます一般的な出来事になるであろうと語る (Lartey, 2006, p. 10)。しかし、「解放の神学」の立場に立つ神学者として、ラーティは、もし牧会神学の理論が今までのように西欧中心のものの見方に偏ったままであれば、西欧地域以外の豊かな思想や実践の伝統が単にその地域だけのなかに留まり、現代世界の牧会神学の発展に

影響を与えることはできないであろうと憂慮する (Lartey, 2006, pp. 10-11)。これが彼にこの本を書かせた動機である。

2) 教会神学の特質をどのように理解しているか

ラーティの教会神学へのアプローチは、「異文化間アプローチ」と彼が呼ぶものである。異文化間アプローチにおいては、問題を取り巻くコンテキストに対して、社会学や心理学などいくつかの専門分野から総合的な分析と考察を加えることが大切であり、異なったものの見方や多様な一時には論議を起すような一意見こそが尊重される (Lartey, 2006, p. 11)。そしてこのような教会神学の業は決して教会の牧師ひとりだけでなされるものではなく、教会というコミュニティ全体で取り組まれるものでなければならない。

ラーティによれば、多元化する現代世界におけるパストラルケアにはいくつかのモデルがある。その中で、彼は、クロスカルチュラルイズム (Cross-Culturalism) を「彼らは私たちと全く違う」という言葉で表されるモデルであるとして批判する。このモデルのもとでは、あるグループの境界は固定されていて、他のグループとの間に疎通性がみられない。そして、それぞれのグループのメンバーは、たとえばアフリカ人としてあるいはアジア人として、純粹で「エキゾチック」なアイデンティティを共有していると仮定されている。このアプローチの危険性は、特定の社会的状況やコンテキストを越えた不変な本質が仮定され、それぞれのグループの特質がステレオタイプ化されやすいことである。

彼はまた、教育における多文化主義 (Educational Multi-Culturalism) —その考え方は「彼らは何で興味深いのだろう。状況を改善するために、私たちはできる限り彼らについて正しく詳細に学ぶ必要がある。」という言葉で表現される—についても、その「上からの視線」が、マイノリティの立場を社会の周縁に固定すると批判する (Lartey, 2002, p. 325)。

この両者のアプローチに欠けているのは、真

摯な人間同士のやり取りにはなくてはならない自発性や繊細な気配りである。彼によれば、真性なパストラルケアは、援助をする者とされる者とがともに傷つきやすく心を開いた状態で真摯に出会う中から起こってくるものでなければならないのである (Lartey, 2002, p. 327)。

以上の二つのモデルに対して、ラーティの異文化間パストラルケアのモデルでは、「あらゆる人はある程度まで (a) 他のすべての人と同じであり (b) 他の誰かと同じであり (c) 誰とも同じではない」 (Lartey, 2003, p. 34) とみなされる。人間はひとりひとり違っているけれども、パストラルケアにおけるあらゆる人間の出会いには何か共通するものがあると考え、このアプローチには、以下の三つの特質がある。それは第一に、人間のあらゆる行動や信念は、それが起こったコンテキストのもとで考察されなければならないこと、第二に、同じように理性的な人間が同じ出来事を考察したとしても、異なった理解に至ることがあることを認めること、そして第三に、互いに他者を人間として尊重し、他者が自分の言葉で議論し、考察する権利を全ての人が認めなければならないこと (Lartey, 2006, p.11) である。

ラーティは、教会神学は、本質的に、コンテキストを重視する「文脈化神学 (contextual theology)」であると述べる。信仰や倫理観や好みや価値観等を含めた人間のあらゆる経験は、社会的に構成され、その人が属する文化によって形成されている。よって、教会神学においては、一人一人がおかれている社会的・文化的位置づけに関心を払わなければならない (Lartey, 2006, p. 89)。また、教会神学においては、ケアを求める人々が実際に生きている場所の歴史的な背景、現在の社会経済的、政治的、宗教的状況を確認し、それら各要因について注意深く吟味することが欠かせない。またこのアプローチにおいては、社会の中で力の強い者に支配され周縁部に追いやられている人々こそが、真の権威をもつ神学を生み出す人々だと考えられている (Lartey, 2006, pp. 42-43)。

このように、解放の神学の立場に立つラーティの異文化間アプローチにおいては、コミュニティ・コンテクスト重視のアプローチをさらに発展させて、グローバル化する世界における人々の結びつきについて考察し、同時に人種やジェンダーなど社会正義についての問題意識を持つことが不可欠だと考えられる。また、人々が生きがいや生きる意味を感じられる世界を作っていくためには、私たちは、さまざまな立場の声、さまざまな立場からのものの見方に真摯に耳を傾けなければならない。また異なった立場からのさまざまな声が彼ら自身の言葉によって語られる機会が与えられなければならない (Lartey, 2006, p. 124)。その意味で、異文化間アプローチは、ものごとを過度に単純化して説明しようとする還元主義や、ものごとを紋切り型の固定観念で見ようとするステレオタイプ化に異議を唱える。反対に、異文化間アプローチは、多様性を尊重し、人々のものの考え方や行動に対する文化の影響を重視しようとするものである (Lartey, 2003, pp. 32-33)。

3) 牧会神学の方法はどのようなものか

ラーティにとって牧会神学とは、パストラルケアに神学的枠組みを提供するための神学的営為であり、その意味で、実践神学の一部門とみなされる。彼は、理論と実践との批判的で創造的な対話の積み重ねによって発展する牧会神学の「実践 (praxis) モデル」を提唱する。牧会神学においては、理論は常に実践への批判を伴い、実践は常に理論への批判を伴う (Lartey, 2006, p. 24)。彼によれば、牧会神学においては実践と行動とそれらについての考察は常に一体であり、これら三つは、互いに批判し合い、また影響を与え合いながら、神学として形成されてゆく。牧会神学は、信仰や神学から生まれるケアの実践と、ケアの実践から出てくる信仰や神学の形態の両者について等しく考察を加えるものであり、そこにおいて理論と実践とは、弁証法的な緊張関係のなかにありながらも一体である (Lartey, 2006, p. 96)。

ラーティにとって牧会神学のリソースとなるのは、第一に聖書、第二に牧会における経験や出会い、第三にコンテクスト、そして最後に経験やコンテクストを分析するための人間科学あるいは社会科学である。

彼の牧会神学の方法においては、パストラルケアに携わる仲間たちとともに、次のようなプロセスが実践される。第一に、私たちの具体的経験、日々私たちが出会う体験とその物語 (教会や病院やカウンセリングセンターなどあらゆる牧会の実践の場所における経験) が、分析と考察の第一義的資料として提示される。第二に、その物語が起こったコンテクストに対して宗教的、社会的、歴史的、心理学的分析と考察が加えられ、第三に、物語の中で現れてくる信仰の問題について神学的考察が加えられる。そして第四には、その神学的考察に関して、今日の教会の現実や自分の教派の神学の伝統を考え合わせながらより深く吟味し、最後に、この結論に基づいて、新しい観点から再度実践が行われる。この五段階のプロセスは、再実践のあとまた改めてそれについての考察が行われるという形で常にサイクルとして循環しながら、よりいっそう洗練されたものへと深められてゆく (Lartey, 2006, pp. 89-90; 2003, pp. 131-138)。

ラーティは、自分の牧会神学を「人間解放に向けての異文化間アプローチの実践」と呼ぶ。彼にとって牧会神学とは、神との関係のもとにあるコミュニティへのケアの実践活動に対して批判的な解釈を施し、神学、社会学や心理学などの理論と対話することによって、より建設的で表現性豊かな神学を創造しようとする実践神学の営為である (Lartey, 2006, p. 14)。

Ⅲ. 結語

本稿で考察したように、1980年代以降のアメリカ、自由主義プロテスタント教会の牧会神学において共通する重要な問題意識のひとつは、牧会に携わる者は、女性差別、貧困、人種差別、家庭内暴力や虐待などを始めとした社会的不正義を自覚し、それらの問題に積極的に取り組ま

なければならないということである。もはや、伝統的アメリカのキリスト教がそうであったように、「中流階級の白人男性」を無批判に教会の基準とすることはできない。牧師は、人々の魂の声に「無条件に」「受容的に」耳を傾けるだけではなく、人生の方向に迷う人々に対して、彼らの道徳的・倫理的な疑問と要求に明確な答えを示さなければならない。また、牧師自身の社会的立場がどのように自分の教会実践に影響を与えているか、社会構造がどのように教会の業全般に影響を与えているかなどについて、自ら省察しなければならない。

本稿で取り上げた3つのアプローチ、1) コミュニティーコンテクスト重視のアプローチ、2) フェミニスト教会神学のアプローチ、3) 異文化間アプローチは、それぞれの立場から、以上のような時代の要請に応えようとする中から出てきたものである。この三者は、基本的には同じような問題意識を持ちながらも、それぞれの神学が形成されたコンテクストと神学的立場の違いによってその強調点に違いがある。しかし、そのような相違を越えて、この三者に共通する特徴をまとめるならば、次のように言えるのではないだろうか。

- 1) 教会神学は、教会などの一ただし教会に限定されない—信仰の「コミュニティ」において、教会に携わる仲間との共同作業の中で形成される。
- 2) 教会神学の営為は、自分とコミュニティの「経験」、教会における「出会い」に深く立脚する。
- 3) 神学形成にとって大切なのは、自分とコミュニティが依って立つ「コンテクスト」を分析し理解することであり、神学だけではなく社会学や心理学など「関連諸科学との対話」を通してコンテクストについての理解を深めることが必要である。
- 4) 自らの教会を省察する中から、自らの教会に役に立つ神学を作り上げてゆくことが必要である。

本稿を終えるにあたって、今日における教会神学の危急な課題と今後の方向性について、ラーティの言葉を引用しながら簡潔に述べたい。ラーティは、私たちは、グローバル化する世界において、多くの人々が貧困の下にあり、しかも多くの地域で今日でも人々が過去の植民地支配の影響のもとに苦しんでいる世界に生きているという。このような強い緊張のもとにある世界で生きている私たちは、どのようにすれば、ひとりひとりの違いと多義性を認め合いながら、しかも共に生きて行けるのだろうか。グローバル化する世界に生きる人々が、「多様性を認め合いながらひとつになる」(unity-in-diversity) ことは、いったい可能なのだろうか (Lartey, 2006, pp. 126-128) —これが彼の問いかけである。異なった人種、文化、ジェンダー、信仰、そして社会経済的背景をもった人々が、どのようにしてこの地球の上で共に生きてゆくことができるのだろうか? 筆者は、次世代の教会神学に要請されるのは、以上のような課題に答えながら、さまざまな立場の人々が対話をし、相互に支援し合うことを目指す教会神学の枠組みではないかと考える。

参考文献

- Augusberger, D. W. (1986). *Pastoral counseling across cultures*. Westminster John Knox Press.
- Burck, J. R., & Hunter, R. J. (1990). Pastoral theology, Protestant. In R. J. Hunter (ed.), *Dictionary of pastoral care and counseling* (pp. 867-872). Nashville: Abingdon Press. PN: Philadelphia.
- DeMarinis, V. M. (1993). *Critical caring: A feminist model for pastoral psychology*. Louisville, KY: Westminster John Knox Press.
- Farley, E. Practical theology, Protestant. (1990). In R.J. Hunter (ed.), *Dictionary of pastoral care and counseling* (pp. 934-936). Nashville: Abingdon Press.
- Fiorenza, E. S. (1984). *Bread not stone: The challenge of feminist Biblical interpretation*. Boston: Beacon Press. [E・S・フィオレンツァ

- 『石ではなくパンを—フェミニスト視点による聖書解釈』山口里子訳, 新教出版社, 1992年]
- Gerkin, C. (1997). *Introduction to pastoral care*. Nashville, TN: Abington Press.
- 樋口和彦「牧会学」(1989) 神田健次・関田寛雄・森野善右衛門編『総説実践神学』日本基督教団出版局
- Lartey, E. Y. (2002). Pastoral counseling in multi-cultural contexts. *American Journal of Pastoral Counseling*, 12 (Fall), 1-10.
- Lartey, E. Y. (2003). *In living color: An intercultural approach to pastoral care and counseling*. 2nd ed. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Lartey, E. Y. (2004). Globalization, internationalization, and indigenization of pastoral care and counseling. In N. J. Ramsey (Ed.). *Pastoral care and counseling: Redefining the paradigms* (pp.87-108). Nashville, TN: Abingdon Press.
- Lartey, E. Y. (2006). *Pastoral theology in an intercultural world*. Cleveland, OH: Pilgrim Press.
- Miller-McLemore, B. J., & Gill-Austern, B. L. (eds.). (1999). *Feminist and womanist pastoral theology*. Nashville, TN: Abingdon Press.
- Mills, L. O. (1990). Pastoral care (history, traditions, and definitions), In R. Hunter (ed.), *Dictionary of pastoral care and counseling* (pp. 836-844). Nashville: Abingdon Press.
- Neuger, C. C. (1996). Pastoral counseling as an art of personal political activism, In C. C. Neuger (ed.), *The arts of ministry: Feminist-womanist approaches*. Louisville, (pp. 88-117). KY: Westminster John Knox Press.
- Neuger, C. C. (2001). *Counseling women: A narrative, pastoral approach*. Minneapolis, MN: Fortress Press.
- Patton, J. H. (1993). *Pastoral care in context: An introduction to pastoral care*. Louisville, KY: Westminster John Knox Press.
- Patton, J. H. (1995). *From ministry to theology: Pastoral action and reflection*. Eugene, OR: Wipf & Stock.
- Whitehead, J. D., and Whitehead, E. E. (1981). *Method in ministry: Theological reflection and Christian ministry*. New York: Seabury Press.
- Wimberly, E. P. (1998). Methods of cross-cultural pastoral care: Hospitality and incarnation. *Journal of the Interdenominational Theological Center*, 25(3), 188-202.

この論文は、2012年度同志社女子大学在外研究助成による研究の一環として執筆されたものである。